

建築の建築 House of Architecture

飯沼 珠実

わたしが幼稚園児だったころ、おとなになったら建築家になりたいと夢みていたことを憶えている。

“真っ白い”スケッチブックに”自由に”落書きをするのがどうしても苦手で、わたしが好んだ落書き帳は、不動産屋の折込チラシの間取り図だった。それをみながら、この壁を取っ払って狭い二部屋をひとつの開放的な空間にしようとか、ソファの色やダイニングテーブルの素材や形を想像した。またわたしの家族では「生活音」こそが喧嘩の引き金となっていたので（父は夜中に仕事をし、早朝に帰宅、日中に就寝する）、それを緩衝することを一番の目的にしたくらしの導線をこどもながらに熱心に考えていた。そして図面上広い方の部屋は姉に譲り、自分は遠慮したふりをして日差しのよい方を選ぼうとする狡猾な妹でもあった。窓際に置いたベッドの上でひなたぼっこをしながらうとうとする時間を想像しては、胸を高めていた。当時のわたしにとって建築家というのは、そういうこと、を考える職業を意味していて、わたしはそれになりたいと思っていた。小中学校では、それとはまったく違う道を考えてたが、高校で「写真をやりたい」と思い立ち、美術大学に入学させてもらった。そしてドイツへ、フランスへと移動した20代だった。

2013年、ちょうど30歳になる年に東京藝術大学大学院に入学した。ヨーロッパでかき集めたきりの経験を、なんらかのかたちに纏め上げたいと考えてのことだった。通学路となった上野の森には、ル・コルビュジエの日本で唯一の建築作品、国立西洋美術館がある。それに向かい合う位置に前川國男の東京文化会館がある。前川國男は、ル・コルビュジエの弟子で、国立西洋美術館建設をサポートし、またその新館を手がけた。その先を進むと、木々の隙間から、ダークトーンの赤紫色をした煉瓦の積み重なりが見えてくる。これが、わたしが上野の森で一番好きな前川國男の建築作品、東京都美術館だ。

東京都美術館が、わたしの日常的な風景に在りはじめて、この建築の姿やかたちだけではなくて、呼吸のリズムや内包する熱量のようなもの、上野の森との関係性、特に森との距離感の調律に気を惹かれるようになった。森がみせる多様な表情、毎日の天気や日差し、流れる季節と繰り返す樹木の繁茂と落葉、そういった森の営みと、とても密接に関わり合っているようなのだ。そして樹木たちも、前川建築を背景に嬉々として、舞でも舞っている様子にみえてくる。東京都美術館は、上野の森の住人なのだと感じるようになった。

もうひとつ興味をもった感覚は、この建築が自分の目にどう映るかが、毎日の自分の気分や状態の指標、心鏡のような存在になりはじめていたことだ。うれしいことがあった日には輝きが増してみえた。何度目をこすって霞んでみえる日には、自分の緊張や抱えているプレッシャーに気がつかされ、森の中で深呼吸をした。また挑戦の日には、拝むような気持ちでみつめては、背中を叩いてもらったような気になっていた。ひとによってはそれが、食べるものであったり、着るものであったりするのだと思う。いつものコーヒーをいつも以上に味わい深く感じたり、逆に味を感じることをすら忘れてしまう日もあるように。

建築を人間のように感じることは、ひとつには建築をつくるのが人間であるということ。起工から竣工までに携わるすべての人間の情熱と努力が、その建築に身体を与える。もうひとつに建築は、その内部で営まれる人間の暮らしによって成熟するという事だろう。＜住むための機械＞としての建築の身体は冷たい。しかしそこに人間の日常が根付き、建築がその身体に人間の感情や経験を蓄えた時、その建築は体温を孕み、息吹くのではないか。人間は建築に安らぎを求め、建築に守られながら、悩み泣き苦しむ、そして笑い歌い踊るのだ。いっぼうで建築は都市の観察者として、その一点に佇み、目の前で起こるあらゆる出来事を、静かにみつめ続けている。そしてある日突然、行方をくらまして、もう二度と帰ってこないときもあることをわたしたちは知っている。

わたしにとって写真を通して建築と向かい合うことは、その建築が吸い込んできた都市の空気や歴史、そしてその身体に蓄積されたひとびとの記憶や痕跡の糸を紡ぎ出すような作業のようなのだ。それらの糸を編み込んで、いつか大きな地図を織り上げたくて、わたしは写真を撮り続けている。

2014年より前川建築を撮影しはじめてから、被写体に対して「わたしもこんなふうに歳を重ねていきたい」と尊敬や憧れを抱いている自分に気がつく。わたしがカメラを向けていたのは建築だったはずなのだが、それはもしかしたら人間を撮ることと、あまり違いがないのかもしれない。

(いいぬま・たまみ / アーティスト)